

岩崎行親の生涯と業績

— 試論 —

三 浦 嘉 久

An Essay on Yukichika Iwasaki: His Life, Ideas, Legacy

Yoshihisa Miura

岩崎行親は、良質の日本主義に満たされた国士、すなわち、「国家にとって有用な人物。また、自分の身をかえりみないで、国事に尽くす人」であり、国士的な教育者であった。わが国の、また鹿児島の当時の時代的な要求に応えて大きな存在感を發揮したキーパーソンであった。

Key Words : [ニッポンコン] [國體詩] [日本主義] [札幌農学校] [国民形成]

(Received September 24, 2010)

はじめに

1 ニッポンコンとヤマトダマシヒ

内村鑑三は札幌農学校同期の畏友・岩崎行親（1855・安政2～1928・昭和3。以下岩崎という）の古稀を祝って祝辞を贈った。祝辞の中で内村鑑三は岩崎を評して、「日本魂の塊」と述べている。

「私の友人中で、岩崎君が最も善く私の日本魂（『ニッポンコン』と読んで下さい『ヤマトダマシヒ』には語弊があります）を解って呉れる者であります。それは君自身が日本魂の塊であるからであります。」⁽¹⁾

内村鑑三は岩崎の終生の親友であり、50年来の知己であるから、岩崎の本質を言い当ててこれに過ぎるものはないと考えられる。やはり、札幌農学校の同期生で岩崎と永年の友人であった宮部金吾も、内村鑑三に賛成して、内村鑑三は「君を評して日本魂の塊と言ふて居るが蓋し適評である。」⁽²⁾と述べている。岩崎は、「日本魂の塊」、ヤマトダマシヒではなく、ニッポンコンの、その塊、であった。

しかし、戦後暫くの間、岩崎は内村鑑三が忌避したヤマトダマシヒの、その塊として排斥される憂き目を見なければならなかった。

*鹿児島純心女子短期大学副学長（〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番1号）

札幌農学校第一期生であり、内村鑑三や岩崎の一期先輩であった大島正健の著書『クラーク先生とその弟子たち』には、岩崎にふれた個所がある。これについて補訂三版の序に補訂者である大島正満（大島正健の子）の手になる次のような注目すべき記述がある。

「本書の再版が刊行された時代は、すべての刊行物が進駐軍総司令部の検閲をへなければならなかった頃で、米軍当局の忌諱に触れる事柄はすべて削除を命ぜられた。したがって初版において「日本精神の権化」と題して記述してあった岳東岩崎行親翁に関する記事、特に翁が高唱して青年子弟の国家精神の昂揚に資した「國體詩」は、割愛せねばならぬ運命に陥ったが、三版においてはこれを復活した」⁽³⁾

進駐軍総司令部によって削除された記事は、当局によって、岩崎の思想が反時代的ないわゆるヤマトダマシヒに当たると解釈されたのであろう。

岩崎は、良質の日本主義に満たされた国士、すなわち、「国家にとって有用な人物。また、自分の身をかえりみないで、国事に尽くす人」⁽⁴⁾であり、国士的な教育者であった。わが国の、また鹿児島の当時の時代的な要求に応じて大きな存在感を發揮したキーパーソンであった。

岩崎の思想は、内村、宮部が別抉したニッポンコンを基調しつつもそこに通俗的なヤマトダマシヒと即断される面を持っていた。岩崎の思想は、その本旨を簡約すれば、後述する日本主義と呼ぶことが適切であろう。

2 岩崎の今日的意義

今日、岩崎の評価は、社会的には、「棺を蓋うて事定まる」とはいかず、その真価は定まったとはいえない。敗戦直後の、当局の評価の、いわば後遺症は今日、なお癒えていない。

そこで、ここでは、岩崎の思想である日本主義とは何か、それはどのようにして形成されたか、岩崎は、その思想をどのように実践したか、そして最後に、岩崎が今日に残した文化的遺産は何かを試論的に検討する。

第1節 岩崎の日本主義

1 日本主義

岩崎の思想、つまり日本主義は、岩崎の独創ではなく、岩崎の畏友である杉浦重剛などの思想と共通する思想である。

そこで、まず杉浦重剛およびその一派の思想を見ることにする。

杉浦重剛は日本主義の立場から井上馨、大隈重信の条約改正案に反対し、政教社を設立して雑誌『日本人』、新聞『日本』に関係した。

日本主義は、1888（明治21）年4月3日に志賀重昂、三宅雪嶺、井上円了、杉浦重剛ら13名によって創設された政教社の主張である。政教社は、機関誌『日本人』を発刊した。そして欧米文化の無批判的な模倣に反対し、大同団結運動に参加して立憲主義的な政治論を主張した。政府の欧化路線・条約改正に関しては、その欧米屈従の態度に反対して対外独立の国粋主義の立場をとり、日清戦争の開戦世論の喚起に努めた。また、陸羯南も日本主義の一人といえよう。陸羯南主宰の新聞『日本』は政教社グループと同傾向の思想をもち、同志的關係にあり、1907（明

治40) 年1月に政教社グループを吸収して機関誌名を『日本及日本人』と改題した。

杉浦重剛の日本主義の特徴は第1に国粹主義，第2に対外独立，そして第3に科学主義である。

2 岩崎の日本主義

(1) 岩崎の日本主義

岩崎の日本主義をよく表現するものは一つは，自作のいわゆる「國體詩」である。1921（大正10）年8月，岩崎夫妻は相携えて伊勢神宮に参拝した。この際の感激を盛り込み，彼は「所懐を試みて以て自らを励ます」と前記する所感を添えた七言の詩を作って，これを敬天塾生に与えた。これが日本教訓詩「國體篇」（以下「國體篇」という）と呼ばれるものである。敬天塾生はこれを「國體詩」と称して愛吟したという。

ただ，「國體詩」にはもう一つあり，それは後年に皇風会塩沢健之等がその三分の一を抄録して全国の学生に推奨して吟詠させることとしたものである。これが俗に「國體詩」（以下「國體詩」という）と呼ばれるもので，広く流布することとなった⁽⁵⁾。

「國體詩」

邈兮二千六百秋	ばくたり，二千六百秋
日東國肇國基神籙	にっとうくにをはじむる，しんちゅうに基づく
國體之優風土美	國體の優，風土の美
宇内万邦無匹儔	うだいばんぼう，たぐいなし
豊葦原之瑞穂國	豊葦原のみずほの國は
是我子孫君臨域	これ，我がみこの君たるべきちなり
行兮爾就而治之	行け，なんじゆいて之を治めよ
宝祚天壤無窮極	ほうそ天壤，窮極なからん
神訓炳乎如日星	神訓へいことして，日星のごとし
施之萬世民心寧	これを萬世にほどこして，民心やすし
三種神器教君道	三種の神器，君道を教う
伝之無窮帝德馨	これを無窮に伝えて，帝徳かんばし
我皇神孫無姓氏	我がこうしんそん，姓氏なし
日本為家君父比	日本を家となし，君を父にひす
億兆斎仰一家君	億兆ひとしく仰ぐ一家の君
義乃君臣情父子	義はすなわち君臣，情は父子
欲孝親者須忠君	親に孝ならんと欲する者は，すべからく君に忠すべし
欲愛國者須愛君	國を愛せんと欲する者は，すべからく君を愛すべし
忠孝一致君國一	忠孝一致，君國いつなり
我國憲法存古文	我國憲法，古文を存す
嗚呼美哉日東君子國	ああ美なるかな，にっとう君子國
上下同心一其徳	上下心を同うして，その徳を一にす
嗚呼優哉万世一系君	ああ優なるかな，万世一系の君

列聖相承垂功勳 列聖あいうけて、功勳をたる

実は、岩崎の大きな特徴は、この「國體詩」に省略されたものの中にある。つまり「國體詩」ではなく、「國體篇」にこそ、岩崎行親の思想が遺憾なく現われている。

さて、「國體詩」および「國體篇」に見られる岩崎行親の思想は、要するに「忠君愛國」(宮部金吾)であろう。

日本魂は、「愛國の精神」(宮部金吾の言)である。それは、祖国日本を愛する点において内村鑑三と共通するものでもある。内村鑑三は、自ら称して「私は大切に之を守ってきた」と述べている。内村鑑三もまた、岩崎行親と同様に日本国をこの上なきものとして愛したのである。

そして、岩崎行親の愛国心は「嗚呼美哉日東君子國 上下同心一其徳」などとあるように国粹的であり、彼は国粹主義者といえよう。

しかし、その国粹主義は、一般に使われている、「自国の伝統的要素を強調する、排外的、右翼的、保守的な立場。超国家主義と同じ意味に用いられる場合が多い」⁽⁶⁾、「自国の国民的特殊性を最も優秀なものと信じて、排他的にそれを維持発展させるように行動する主義」⁽⁷⁾という意味のものではなかった。

実は國體詩の「我国憲法存古文」の直後に省略されている箇所にも、次の一節がある。

近歳狂風捲歐土 近歳狂風、欧土を捲き
大厦驟破獨塊魯 大厦たちまち破る、独塊魯
或唱平等或民主 或は平等を唱え、或は民主
或説共産或廢武 或は共産を説き、或は廢武
一利一害属空論 一利一害、空論に属す
畢寬悪政構怨府 畢寬悪政、怨府を構う
國各有粹開和平 國各粹有って、和平を開く
失之者衰存者榮 之を失う者は衰え、存する者は榮ゆ

岩崎の特徴的な国家観がよく表れているのは、「國各有粹開和平 失之者衰存者榮」という詩句である。

岩崎自身の説明によれば、「国家というものは一朝一夕にできるものではない。皆各々その建国以来の国粹というものがあってそれでこそ平和が保たれて行くものである」⁽⁸⁾、国粹とは「建国以来その国民の祖先が尽くした努力と払った犠牲の歴史的記憶」⁽⁸⁾というものである。岩崎はこの国家観をジョゼフ・エルネスト・ルナン (Joseph Ernest Renan, 1823-1892) に学んだといっている。

また、「國體篇」には岩崎が第一次世界大戦後の西欧を直視し、わが国は西欧文化から学ぶべき所は学ぶことを主張している次の詩句がある。

新説何必盡荒誕 新説、何ぞ必しも盡く荒誕ならんや
他山石足攻我瓊 他山の石、我が瓊をみがくに足れり

採長補短祖先法 採長補短は祖先の法
 吸収同化我人情 吸収同化は我が人情

これについて、1917（大正6）年にソビエトに社会主義革命が起こり、当局は革命的動向を懸命に防ぎ止めようとしていた当時であったが、岩崎は、「社会主義なり共産主義なり絶対の平等主義なり必ずしもことごとく荒誕（おおげさで、でたらめなこと：筆者注）の説ばかりと思って全然退けてしまうべきものではない。その一部の真理はこれを認めて社会政策として採用することもあらねばならぬ」⁽⁸⁾と、右翼が驚くような解説をしている。

つまり、岩崎の日本魂は、大島正健が述べているように、「頑迷で排他的な右翼ばりの国粹主義ではな」⁽⁹⁾く、「その限界は広」⁽⁹⁾かったのである⁽¹⁰⁾。

岩崎の日本主義は、つまり日本魂は祖国日本を愛し、その発展を願う健康な国家主義であり、ナショナリズムというべきである。岩崎の日本主義は全体として杉浦重剛の日本主義と同様であり、特に思想的な独自性は見られないといってよいだろう。要するに国際的・理性的な国粹主義ともいうべきであろう。

「國體篇」に歌われているとおり、岩崎の視界は広く世界をおさめており国際的であり、偏狭な国粹主義者とは異にしている。そして、その思想は因循でもなく頑固でもなく、その反対に柔軟であり進取の性質に富むものであった。ここに熱烈な基督教徒となって宗教面では岩崎と氷炭相容れないようであった内村鑑三との共通点があった。

そして、内村鑑三の思想との相違は、岩崎の日本主義を国家主義と捉えるときに、内村は国家主義、国際主義を超えた世界主義、そしてキリストが主権者である宇宙主義であったところにある。

しかし、他方で岩崎は、「國體詩」によく表明されているように、ヤマトダマシヒ、すなわち現世的な忠君、主権在君の思想および神話的国家観を濃厚に持っていた。

これに対して、内村鑑三の理想は、日本国の隆盛もさることながら、日本国をはるかに超えた人類の幸福、宇宙の完成にも及ぶ高次元にあった。

内村鑑三の思想は、その死後発見された、彼の古い英語聖書の扉に彼自身の手で書かれた英文の句を和訳し写真版にされて、多磨墓地に造られた彼の墓の上に刻まれた次の言葉によく表明されている。

我が墓碑に刻まるべきもの
 私は日本のため
 日本は世界のため
 世界はキリストのため
 そして万物は神のため⁽¹¹⁾

このような世界主義および宇宙主義は岩崎の国際的な国粹主義にない思想であり、ここに内村鑑三と岩崎との思想の異同が、別言すれば岩崎の独自性が明確に浮かび上がってくる。

二人の「白鳥の歌」は、それぞれにその思想を要約していて美しく、深い感銘を与える。

内村は、死の直前に、「聖旨にかなわば生延びて更に働く。しかし如何なる時にも悪しき事は吾々及び諸君の上に未来永久に決して来ない。宇宙万物人生ことごとく可なり。言わんと欲する事盡きず。人類の幸福と日本国の隆盛と宇宙の完成を祈る。」¹²⁾と述べ、日本的キリスト者としての最後を全うした。これに対して、岩崎は死の直前に、「日本の現状では死にたくない。後は宜しく諸君に頼む」¹³⁾と述べたという。岩崎は死に至るまで国を憂い世を想って止まなかったのである。まさに終生の国士であった。

二人は、「勇ましい高尚なる生涯」¹⁴⁾という「最大遺物」を後世に遺してくれた点で共通する生涯を送った、同門の札幌農学校卒業生であった。

第2節 岩崎の思想形成

1 日本主義思想の形成

岩崎は名家の岩崎家に生まれ、家風である忠君愛国の精神を多分に承け、その上神官（住吉神社の宮司）の厳父から教育され、そこにおいて思想の骨格が形成された。

岩崎家の先祖は、陸奥国の佐藤庄司元治の三男・正治に遡る。正治は、有名な鎌倉初期の武将で義経四天王の一人に数えられた佐藤継信および忠信の弟である。継信は源平の合戦で屋島（香川県高松市）の戦いに際し、平家の勇将能登守教経の強弓から義経を守り、その矢面に立って戦死したその忠烈な最後で有名である。

正治は、後にいたり讃岐の国に移住し、岩崎家は爾来40余代連綿として続き、代々神道を奉じた家である。

岩崎の思想の心髄は、わが国固有の宗教である神道であった。神道はわが家の宗教であり、岩崎は素直に神道をわが宗教とした。そして、宮部金吾が述べたように、「君は後に教育家となっても熱心な神道論者であった」。

神道はわが国固有の文化を尊重する国学と一心同体のところがある。岩崎はこの国学を13、4歳の頃、京都皇学所に入って学ぶに及び、岩崎の神道思想は堅固なものとなった。

長じて岩崎は札幌バンドを生んだ札幌農学校に学ぶ。彼の学生時代は「シュトゥルム・ウント・ドラング」（嵐と衝動）の時代であったが、結局キリスト教徒にはならなかった。岩崎は後年、札幌農学校を回顧して次のように述べている。

「上級生の某から明日はハリスさんの演説があるから某教師の官宅へ集まれとの事であった。私はきっと御前の宗教は何であるかと聞くであろう、その時私は日本人だから神道であると答えてやろう。これも唯の人間からすすめられたのではなく、京都の皇学所で神様と盃をして公然ときめたのであると言ってやろうなど、一夜は学科の下読みどころではなかった。」¹⁵⁾

また、岩崎は1871（明治3）年母と共に東京に引き移り、近藤佳山や宇田甘冥から漢学を教わった。漢学すなわち儒学である。岩崎が漢学から修得したものは礼節、孝、信義、寛容、厳正、そして仁、つまり深い思いやりなどの儒教道徳であったと考えられる。ここで岩崎の思想はいっそうの広がりを取ったのである。

このような学習遍歴を経て、岩崎の思想は幼少年時代に、家庭において、特に厳父、致之から神道を教育されて、思想的骨格が形成され、その後長じて国学、漢学を学修して、札幌農学

校入学前の青年時代には彼の思想はほぼ形成を終えていた。

2 札幌農学校の感化

蝦名賢造『札幌農学校』によれば、「クラークによって導かれようとしている札幌農学校の精神そのものは、まず、ピューリタニズムの起源への忠実な志向、つぎに近代自然科学とその実証主義、そしてフロンティア・スピリット、これら三つのものがいわば三位一体になったものとして結びつけられていたと考えることができる。」⁽¹⁶⁾という。

岩崎も、札幌農学校でピューリタン精神、近代自然科学とその実証主義およびフロンティア・スピリットを修得している。

まず、ピューリタン精神である。

札幌農学校はクラークによるキリスト教教育で有名であるが、岩崎は全面的にキリスト教を受け入れて受洗するにはいたらなかった。のみならず在学中に頑固な反キリスト者になった。当時札幌農学校に來たハリス宣教師にキリスト教に反対の論文を出して、ハリス氏をしてまれに見る精神家として感心させた。というのも岩崎は国学者の家に生まれ、また幼時から国学と漢学の教育で固められたために熱心な神道論者となり、新しい西洋の宗教は必要としなかったからである。

後世、鹿児島一中の記録には、先生は「札幌農学校に学んだにも拘らずキリストは嫌いであつた。」⁽¹⁷⁾と伝えられている。そして、終生、キリスト教徒にはならなかった。

しかし岩崎の神道思想と彼の生活態度は、キリスト教とキリスト教信者の生活態度と濃い近親関係にある部分が見られる。

だからこそ、彼は大勢に押されてではあつただろうが、一旦はクラークが帰国前に書き残した「イエスを信ずる者の誓約」に署名はしたのである⁽¹⁸⁾。それは、彼の人格からして全くの「仮面の告白」ではなかつたと思われる。もっとも、「誓約」には適当な機会に受洗して、教会会員になることも記載されていたが、岩崎はその後受洗することには頑強に拒んだ。

また、この「誓約」署名の前の出来事であるが、宮部金吾の記述するところによると、入校後まもなく彼らは教頭ウィリアム・ホイラーから、有志の者は禁酒禁煙の誓約書に署名するよう勤められて、岩崎も進んでこれに署名している。

その禁酒の「誓約書」とは、クラークの作り残した誓約書であつて、全文を訳すれば次に示すようなものであつた。

「我等下に署名する札幌農学校の職員並に学生は、學校と關係ある限り、醫藥の外に、如何なる形にても阿片、煙草及酒類の使用ヲ嚴禁する事を茲（ここ）に誓約す。又併せて賭博及神の名を穢す事なきを誓ふ。」⁽¹⁹⁾

これに対して、まずホイラー、ペンハロー、ブルックスの三教師の名がしたためられ、それに続いて学生側では真っ先に宮部、つづいて太田（新渡戸）稲造、内村鑑三、および岩崎の四人組が率先して署名し、順次全クラス18名が署名誓約した。このとき学生は全員クラークが横浜で購入した英文聖書を1冊ずつ貰っている。

このようなピューリタン精神はキリスト教に由来するが、岩崎はキリスト教徒ではなかつたが、本来、ピューリタニズム的な清貧の思想およびその生活態度を持っており、それは札幌農学校

においてますます深化された。そして、これは終生、岩崎の日常生活に表れている。

次に、近代自然科学とその実証主義である。

これは岩崎の科学的精神、合理主義として方々に表れている。

岩崎は、キリスト教におけるとるべき所はとるというところに彼の積極的な受容の姿勢が見られる。例えば、ルナン『イエス伝』(1863年)は彼が推奨する書の一つであった。本書は近代合理主義的な観点によって書かれたイエス伝として知られている²⁰⁾。また、岩崎は、キリスト教を拒んだがこれを排斥はしなかった。ここに岩崎の思想の近代的な柔軟さ、寛大さをみることが出来る。

さらに、岩崎は神道論者であったが、当時の神道に批判的であり神道の改良の必要を唱えている。これも岩崎の合理主義に由来している。

そして、フロンティア・スピリットである。

これは岩崎が鹿児島知事加納久宜の突然の懇請に人生意気を感じて、全く未知の、当時辺境の鹿児島に勇躍赴任して、新規の諸事業と果敢に取り組んだことに表れている。

結局、岩崎も札幌農学校の子であり、岩崎の思想と行動は、神道を核心とした日本主義を基調にしてその周りを西欧的な札幌農学校精神でくるまれるものであった。また、岩崎は和魂洋才を尊んだ明治人のよき典型の一人であったともいえよう。

3 思想の歴史的な限界

人の生涯は誰しも、歴史的な制約から免れない。岩崎も時代の子であり、今日から見れば歴史的制約あるいは歴史的なパラダイムを背負うことは当然であろう。

岩崎の思想を現代の世の中にそのまま提示すれば、批判を浴びることは避けられまい。その思想は、昨今影が薄くなった儒教道徳や皇室中心主義から成り立っており、その点でそのままでは今日受け入れがたい。

1948(昭和23)年6月19日、衆議院は「教育勅語等排除に関する決議」を決議した。この決議は岩崎の思想をも排除する内容のものであった。

決議は述べる。

「民主平和国家として世界史的建設途上にあるわが国の現実、その精神内容において未だ決定的な民主化を確認するを得ないのは遺憾である。これが徹底に最も緊要なことは教育基本法に則り、教育の革新と振興とをはかることにある。しかるに既に過去の文書となつてゐる教育勅語並びに陸海軍軍人に賜りたる勅諭その他の教育に関する諸詔勅が、今日もなお国民道徳の指導原理としての性格を持続しているかの如く誤解されるのは、従来の行政上の措置が不十分であつたがためである。

思うに、これらの詔勅の根本理念が主権在君並びに神話的国体観に基いている事実は、明かに基本的人権を損い、且つ国際信義に対して疑点を残すもとなる。よつて憲法第九十八条の本旨に従い、ここに衆議院は院議を以て、これらの詔勅を排除し、その指導原理的性格を認めないことを宣言する。政府は直ちにこれらの詔勅の謄本を回収し、排除の措置を完了すべきである。

右決議する。」

岩崎の思想も、その「根本理念が主権在君並びに神話の国体観に基いている」ことから、「基本的人権を損い、且つ国際信義に対して疑点を残すもととなる」であろう。このため岩崎の思想は戦後日本においては国家的に、実際には進駐軍司令部により、排除されるものとなったといえよう。

このように岩崎の思想は、戦後の日本では排除されることになる。

しかし、問題は岩崎の思想は新しい戦後日本の思想界とはなじまないものであったにせよ、抹殺するかのような対応が正しかったかどうかである。

新しい憲法第21条は、戦前の憲法とは違い、広く思想の自由を認めた。その思想・言論の自由の中に少数意見の尊重が含まれている。「國體篇」に表れた岩崎の思想は、今日においては一考を要する少数意見としての価値を持つものといえよう。全くの排除は、「採長補短祖先法」を主張した岩崎から偏狭と厳しく批判されそうである。

第3節 岩崎の文化的遺産

1 岩崎の業績

岩崎は1894（明治27）年3月、加納知事の懇請により、鹿児島県尋常中学校教諭として赴任し、同年12月に校長に任じられた。

加納知事の厚い信任のもとで、あわせて県嘱託として農事取調に任じられ、学校の仕事の傍らに県政にも深く寄与することとなり、鹿児島県の農業改良事業への貢献も大きい。

鹿児島における岩崎の教育的業績は主なものとして次のものが挙げられよう。

(1) 鹿児島県旧制中学校の創設と学校経営

岩崎は、1894（明治27）年3月に、同年2月に鹿児島市山下町に創立された鹿児島県尋常中学校教諭として赴任した。初代の田島彦四郎校長のもとにあつて教頭であつた。田島校長は県内出水の人で法制局参事官であつて教育については素人であるから、初めから教育の実務は岩崎がとつた。毎週18時間の教育を担当して校長や教頭のするような仕事をこなした。しかしそれも暫くの間で同年12月に田島校長の後を承けて校長に任じられた。これは予定のコースであつたものと思われる。

鹿児島県尋常中学校は校名の変更が頻繁であつた。1898（明治31）年4月に鹿児島第一尋常中学校、1899（明治32）年4月に県立第一中学校と順次改称した。さらに1901（明治34）年に県立鹿児島中学校と改称し、1906（明治39）年4月、同校分校の独立に伴い、県立鹿児島第一中学校と改称し、校名が安定するに到つた。

鹿児島県尋常中学校の分校が独立したものとして、加治木中学校、川内中学校、川辺中学校、第二鹿児島中学校（1901〔明治34〕年に県立鹿児島中学校分校として発足）がある。

岩崎は、鹿児島県尋常中学校の校長とともに川内、加治木、川辺の中学校の創設に尽力し、創立時の校長を兼務し、一時は三つ四つの校長を兼任することもなつた。

鹿児島県立川内中学校は、1897（明治30）年に県内で2番目に古い中学校（鹿児島県尋常中学校第一分校）として開校され、1901（明治34）年に鹿児島県立川内中学校と改称された。県立加治木中学校は、1897（明治30）年に加治木領主館跡に鹿児島県尋常中学校第二分校として

創立され、4月21日に開校された。1901（明治34）年に県立加治木中学校と改称された。そして県立川辺中学校は、1900（明治33）年に一中の分校第四中学校として開校、初代校長は一中の岩崎校長が兼任した。翌年県立川辺中学校と改称し、吉村喜一郎校長に代わった。

岩崎は、1902（明治35）年3月に県立鹿児島中学校校長を辞職した。

(2) 第七高等学校の創設とその学校経営

1901（明治34）年3月、文部省直轄諸学校官制改正の件が公布され、全国7番目の旧制高校として鹿児島第七高等学校造士館が城山下の鶴丸城跡に設立された。創立に当たって旧藩主島津家の絶大な支援があっただけでなく、1905（明治38）年4月、国庫支弁に切り換えられるまで、学校経費は島津家の寄付金によって賄われた。このことが藩学の伝統を継ぐ旧制高校として、全国の旧制高校の中でも異例とされる造士館という校名につながったものと考えられる。

岩崎は、1901（明治34）年4月に、第七高等学校造士館館長に任じられ、初代校長として万般の学校経営に当たった。岩崎が最大の努力を払ったことは最も優良なる教員を得ることであったと思われる。

第七高等学校造士館は1901（明治34）年9月に選抜試験を施行した。

そして10月25日に開校の式典が文部大臣菊池大麓臨席の下に盛大に挙行された。以来10月25日は創立記念日と定められ、毎年多彩な行事がくり広げられた。

岩崎は七高の経営に情熱を傾け、教授陣の充実をはかり、質実剛健の気風を作りあげた。

温情を以て生徒を指導し、また、学生戦迹見学団を組織し自分躬ら統率して旅順その他を視察し、随時硬教育も施し、幾多の人材を育て日本全国に送った。

岩崎は、11年間館長の職にあり、1912（大正元）年9月、辞して千葉に静養する。岩崎は若い頃から頑健な体ではなかった。

後年、第七高等学校は戦後の学制改革によって閉校となったが、鹿児島大学の母体の一部となりその組織と施設が継承された。

(3) 私立福山中学校の創設と学校経営

1918（大正7）年に始良郡福山村に私立福山中学校が創設された。郷里福山村出身の田中省三が私財25万円の大金を寄付してできたものである。

岩崎は田中省三に請われて校長として再度来県し、在任6年に及んだ。岩崎は私立中学校の下に抱負の行い易きを感じ病後の身を以てこれに当たった。

校長に元第七高等学校造士館長の岩崎、教頭に鹿児島尋常中学校元教頭である日高重孝という豪華な教授陣で発足した。

岩崎の教育理念は、「敬天塾歌」によく表れており、そこに次のように歌われている。

正義公道、我が尚ぶところ
敬天愛人、これ我が箴
天に背きて道なく、また教なし
道に違つて、何ぞよく忠孝を説かん²⁾

岩崎は、この精神で「天に事うる心、よく人を導くべし」として新教育を導入し異色ある英

才教育を行った。

また、学校の中に一構えの宿舎を建て西郷南洲の敬天愛人の語により敬天塾と称し全寮制にした。岩崎は起き臥しを生徒と共にして指導した。

岩崎は福山中学校校長時代から詩を作ることに興味を感じるようになり、作品を精神教育の資料にした。特に有名な詩が、1921（大正10）年8月、夫妻が伊勢に参詣したとき作詩した既述の「國體篇」である。

岩崎は地元では福山聖人として一般から崇拜されたという。

岩崎は、1924（大正13）年3月、退職した。

岩崎が去った後の福山中学校には、岩崎のあと第2代の校長に日高重孝が就任した。福山中学校は1924（大正13）年、出火し、普通教室2棟・本館及び倉庫1棟焼失（原因不明）した。本館起工式、本館落成。1925（大正14）年、理事長田中省三死亡、校長日高重孝が理事長に就任した。1934（昭和9）年に鹿児島県福山中学校と改称した。

1945（昭和20）年に鹿児島県立福山中学校と改称、さらに1948（昭和23）年に学制改革により鹿児島県立福山高等学校と改称した。

注目される出来事は、1968（昭和43）年に創立50周年記念式典が行なわれ、岩崎先生胸像除幕式が挙行されたことであろう。

そして、鹿児島県立福山高等学校は1987（昭和62）年3月、閉校となった。卒業生5500余名という。

2 岩崎の業績と現代

(1) 岩崎の思想

岩崎の思想は、「國體篇」に濃縮された国家主義思想ということであろうか、今日、ほとんど顧みられることはない。

(2) 岩崎の教育業績

学制改革で、旧制中学校は新制高等学校になり、旧制高等学校は七高も含めて廃校になった。福山高校も今はない。

岩崎の今日に残る教育業績としてまず、鹿児島大学、鶴丸高校、加治木高校、川内高校、川辺高校を挙げることができるかもしれない。もっともこれらは高等教育、中等教育制度それ自体の改革的な発展とみるべきであり、岩崎が創設した七高、一中、加治木中、川内中、川辺中の連続的・内発的な発展とはいえない。従って、これらの学校に創設者岩崎の影は、今日ほとんど見ることができない。

(3) 岩崎の事跡

岩崎が創設した業績で、それが当時のままの形態で残っているものは何もないといってよいだろう。およそその全てが過去のものとなった。

第4節 岩崎の今日的意義

1 問題の所在

岩崎に所望され第七高等学校造士館開校の時熊本の高橋から転任して七高教授となり生徒監も勤めた山田準は、岩崎が世を去る2年前まで鹿児島において比較的岩崎を能く承知していると自認する。

その山田準は、岩崎を賛評して「嗚呼偉人は死せず。先生は永久に鹿児島の宝否国家の宝である。」²³と述べた。

しかし、今日、偉人岩崎はどこにいるか。私たちはどこにも彼の姿を見ることができない。ただ、鹿児島県の辺地ともいべき福山高校跡地に岩崎の胸像があるのを見ることができるだけである。

また、今日、岩崎は「鹿児島の宝」であるか。また、「国家の宝」であるか。しかし私たちは誰もそれを公言する人があるのを聞かない。

問題は、「私たちは岩崎を今日、必要とするか。」という問いに答えることであろう。私はこの問いに対して肯定したい。

その理由は以下のようにいくつかの点にわたる。

2 岩崎の今日的意義

(1) 岩崎の思想

岩崎は、杉浦重剛とともに国粹保存や日本主義を唱えた。その真髄は「救世憂国」に行き着く国家主義であった。

しかしだからといって岩崎を日本ファシズムの名で呼ばれる超国家主義と直ちに結びつけてしまうのは短絡にすぎよう。日本主義については近年の歴史学界でも「健康なナショナリズム」という見方が有力なようである。

また、日本主義については戦前において石橋湛山が主張した小日本主義、そして当時多くの日本人が支持した大日本主義がある。そして岩崎の日本主義は日本からアジアに進出して植民地を広げようとする大日本主義ではなかったことに注目したい。

岩崎は、欧化一辺倒の浮薄な風潮に逆らって、今の言葉で言えば日本のアイデンティティの確立を叫んだ清廉、気骨の知識人、教育家として立ち現れた人物である。この点において岩崎の思想は今日、国際化の動向の中で参照され、よく超克されるべき先行業績である。

いったい、わが国はこの国際社会にあってどのような独自性を主張すべきであるか、どこにわが国の地位を見いだすべきか。これらの問題については今、国民的な論議が必要であろう。

特に、岩崎が提起する、教育上における国家建設および国民形成の問題は重大である。

戦後制定され教育の憲法といわれる「教育基本法」(昭和22年法律第25号)(以下旧法という)は次のように規定している。

まず前文である。「われらは、さきに、日本国憲法を確定し、民主的で文化的な国家を建設して、世界の平和と人類の福祉に貢献しようとする決意を示した。この理想の実現は、根本において教育の力にまつべきものである。われらは、個人の尊厳を重んじ、真理と平和を希求する人間

の育成を期するとともに、普遍的にしてしかも個性ゆたかな文化の創造をめざす教育を普及徹底しなければならない。ここに、日本国憲法に則り、教育の目的を明示して、新しい日本の教育の基本を確立するため、この法律を制定する。」

ここでは「民主的で文化的な国家の建設」が謳われている。この文言は、改正教育基本法（平成18年法律第120号）（以下新法という）の前文においては修正されて「民主的で文化的な国家を更に発展させる」となっている。

次に、第1条（教育の目的）である。旧法では「教育は、人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人の価値をたつとび、勤労と責任を重んじ、自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。」と規定されている。そしてここでは「平和的な国家及び社会の形成者として」の「国民の育成」が謳われている。また、第1条は新法では、「教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。」と修正されているが、「平和的な国家及び社会の形成者として」の「国民の育成」が謳われている点は同じである。

これら前文および第1条にみるように、今日においても、「国家建設」および「国民の育成」は重要な教育課題である。これらの課題への取り組みは戦後日本が懈怠してきたものではなかったか。そこで「国家建設」および「国民の育成」を今日取り組むとしたら、岩崎の「國體篇」にある次の詩句は顧みてよいであろう。

國各有粹開和平 國各粹有って、和平を開く
失之者衰存者榮 之を失う者は衰へ、存する者は榮ゆ

新説何必盡荒誕 新説、何ぞ必しも盡く荒誕ならんや
他山石足攻我瓊 他山の石、我が瓊をみがくに足れり
採長補短祖先法 採長補短は祖先の法
吸取同化我人情 吸取同化は我が人情

(2) 岩崎の教育業績

岩崎はすぐれた教育経営者であり、教育者であった。

岩崎が取り組まなければ、七高、一中、加治木中、川内中、川辺中が今日見るような順調な発展形態としての鹿児島大学、鶴丸高校、加治木高校、川内高校、川辺高校がありえたかどうかは疑問の余地があるように思う。

本稿では、取りあえず、「本県旧制中学校教育の父」²³であり、「本県高等教育の礎を築いた」²⁴という評価に賛意を表しておきたい。

(3) 岩崎の生涯

これは今日の私たちに多くのものを教えてくれる。

岩崎の親友であった内村鑑三は、「何か少しでも永遠的事業に携わる事が出来て世に生まれ出た甲斐があるのであります。人は裸にて母の胎を出て裸にて逝くのであります。貧も一時であります。富も一時であります。位階勲章も此世限りの名誉であります。死して死なざるものは正義に由って生きた生涯であります。」²⁵と、生涯の評価の基準を示している。

これに従うならば、岩崎の生涯は、「正義に由って生きた生涯」ともいえよう。ここには一市民として、私たちが今日学ぶべき岩崎の不朽の価値が示されているといえよう。

むすび

第2次世界大戦前の岩崎は国士と呼ばれて名高かった。しかし敗戦後の今日、鹿児島県民からも忘れられてその存在さえ知らぬ者が多い。

鹿児島における岩崎は、「水を得た魚」のように見える。岩崎にとって鹿児島は、その思想を実現するにあたって天恵の約束の地ともいうべき、生涯最良の実践の現場であった。

顧みて、戦前、戦後を通じて、鹿児島県の政治・文化は、岩崎が創設した諸学校を卒業した人々によって担われてきた。

岩崎とその残した文化的遺産は、彼亡き後、久しく鹿児島の近代化・現代化にとって不可欠のものであったといえよう。

のみならず岩崎がその基盤を据えた旧制第七高等学校は、個性ある高等教育機関としてわが国の指導者の揺籃の地の一つとなり、その国家的寄与は大きい⁹⁶。温故知新をいうならば、ここにおいても岩崎の業績を忘れてはなるまい。

注

- (1) 敬天舎同人編『岩崎行親先生伝並詩歌抄』間組, 1956, 14-15頁。
- (2) 前掲, 4頁。
- (3) 大島正健『クラーク先生とその弟子たち』国書刊行会, 1973, 5頁。
- (4) 『国語大辞典(新装版)』小学館, 1988, 電子辞書による。
- (5) 「國體詩」が何時作られたかは今審らかにできないが、日本学生吟詠連盟の結成が、1934(昭和9)年11月18日であるから、おそらくその前後であろう。とすればその制作は岩崎の没後となり、改作について岩崎の諾否が疑問として残る。
- (6) 『国語大辞典・新装版』小学館, 1988, 電子辞書による。
- (7) 『新明解国語辞典・第5版』三省堂, 1997, 電子辞書による。
- (8) 岩崎行親「日本教訓詩譯解」『敬天舎同人・舎報第17号』1997, 敬天舎, 82-86頁。ただし、引用者が本文を口語訳した。
- (9) 大島正健, 前掲書, 140頁。
- (10) 岩崎の令孫であられる岩崎松之助氏は、岩崎と家庭生活を共にした方であったが、祖父の思い出として、来客する人の中にいた偏狭な国家主義者を大変嫌悪する発言を聞いた記憶を私に語られた。
- (11) 政池仁『内村鑑三傳』三一書房, 1953, 379頁。
- (12) 前掲, 374頁。
- (13) 敬天舎同人編, 前掲書, 11頁。
- (14) 内村鑑三『後世への最大遺物・デンマルク国の話』岩波書店, 1963, 51頁。

- (15) 岩崎行親「神道論」『敬天舎同人・舎報第9号』敬天舎, 1989, 34頁。
- (16) 蝦名賢造『札幌農学校』図書出版社, 1980, 143頁。
- (17) 安田尚義編『鹿児島一中記』第一法規出版, 1964, 81頁。
- (18) 「誓約」の原文と岩崎を含む署名者を記載した写真版が, 大島正健著・大島正満・大島智夫補訂『クラーク先生とその弟子たち』新地書房, 1991, 114-115頁に掲載されている。因みに, 大島正健訳による「誓約」には, 初めに「下に署名する札幌農学校の学生は, キリストの命に従ってキリストを信ずることを告白し, 且つキリスト信徒の義務を忠実に尽くして祝すべき主即ち十字架の死を以て我等の罪をあがない給いし者に, 我等の愛と感謝の情を表し且つキリストの王国拡がり, 栄光現れ, そのあがない給える人々の救われんことを切望す。故に我等は今後キリストの忠実なる弟子となりて, その教えを欠くことなく守らんことを厳かに神に誓い且つ互に誓う」(前掲, 113頁)とある。しかし, 後半には, 「(安息日)には即ち凡て急を要せざるすべての業務を休み, 勉めて聖書を研究し, 己の徳を樹て, その他潔き生活のために用ゆべし。汝の父母と有司とに従い, 且つこれを敬うべし。詐偽, 窃盗, 兇殺, 姦淫若しくは他の不潔なる行為をなすべからず。汝の隣を害すべからず」(前掲, 116頁)という文言もあり, 岩崎はここに深く共感したのではないか。従って岩崎は疎ましい背教者とはまではいえないと思う。故にこそ岩崎と, 大島などの一期生キリスト者および内村, 宮部などの二期生キリスト者たちとの終生の深い友情が続いたのである。
- (19) 宮部金吾「学生時代の内村鑑三君」鈴木俊郎編『追想集内村鑑三先生』岩波書店, 1934, 6-7頁。
- (20) 岩崎が七高館長在任中, 訪問した英国大使マクドナルド夫妻に書庫を見せたときの挿話は, 岩崎のキリスト教に対する姿勢の一端を示している。夫人からキリスト教に関する部を見せて欲しいと言われて, 岩崎は「外国語のものはこれだけですと言って一冊のバイブルとアルネストルナン氏のキリスト傳を見せた」(岩崎行親「神道論」, 前掲書, 32頁)。すると夫人は「校長さんははひどい。あなたはこんなものを生徒に読ませますかと云ふて顔をしかめたから, 私は面白いから読ませますと言ったら, それはひどいと言ったばかりでサッサと書庫を出て行かれた」(前掲, 32頁)。
- (21) 敬天舎同人編, 前掲書, 58頁。
- (22) 前掲, 26頁。
- (23) 山下巖「岩崎行親」南日本新聞社編『鹿児島大百科事典』南日本新聞社, 1981, 89頁。
- (24) 前掲。
- (25) 内村鑑三, 前掲書, 51頁。
- (26) 戦中の外務大臣を二度勤め, 開戦に反対し, 終戦に尽力した東郷茂徳もその一人である。東郷は岩崎行親の教え子の一人であった。鹿児島第一中学校在学中に校長岩崎の目にとまり, なにかと目をかけてもらうようになったという。後に, 岩崎は, 東郷が第七高等学校造士館に入学すると同時に, 同校の校長として赴任。結局, 中学高校計8年にわたり, 東郷の教育に携わった(東郷茂彦『祖父東郷茂徳』1993, 文藝春秋, 36頁)。

(本稿は, 平成13年4月, 「岩崎行親の教育事業と思想形成に関する研究」に対する鹿児島県

育英財団からの研究助成によって成ったものである。未定稿で未熟なものであるが、ここに発表して読者のご教示・ご批判を仰ぎたい。

また、岩崎の令孫であられる岩崎松之助氏からはご生前に多くの貴重な証言と資料を拝受した。深く感謝申し上げ、ご冥福をお祈り申し上げます。